

大阪商業大学学術情報リポジトリ

ジャパンIRと国際観光の需要特性と規模予測－韓国人需要を中心に－

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2014-12-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梁, 亨恩, YANG, Hyung-eun メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/20

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ジャパン IR と国際観光の需要特性と規模予測

— 韓国人需要を中心に —

梁 亨 恩

1. 序

世界的にカジノは重要なレジャー活動であり、他のレジャー活動と共通性がある (Cook、1992)¹⁾。カジノをベースにした統合リゾート (Integrated Resort、以下 IR)²⁾ はメガツーリズム³⁾の象徴になっている。IR は低迷した国際観光産業を活性化させ、地域および国家へのプラス影響が評価されている。現在も多くの国が国家成長戦略として IR を検討している。国内でも2013年12月臨時国会で IR 推進法「特定複合観光施設区域の整備の推進に関する法律」が上程された⁴⁾。

アジア地域の経済成長によって中産階層が拡大し、ギャンブルは新しいレジャー活動となった (梁亨恩、2006)⁵⁾。マカオとシンガポールの業績からもこれは確認でき、今後も域内の経済成長によって一層拡大されると予想される。日本の IR (以下 J-IR) も先行国と同じく域内の観光客を吸引することは明白であると思われる。改めて J-IR が誘引する国際観光客の特性と規模について考える必要がある。

今まで多くの報告書がカジノ合法化の経済的影響に対するテーマで書かれているが、それは単一カジノ施設を根拠にした国内需要の予測であり、IR のような統合的なリゾートの観点ではなかった。そこで本研究では IR が誘引する国際観光客の特性と規模を把握することを目標にしたい。まず、問題提起として IR 先行国の現況と展望を取り上げる。それに関連する理論としては国際観光とギャンブル・モチベーション理論、さらに需要予測に関する方法論について述べる。

最後に、国際観光客が持つ日本カジノの訪問意思について調査した結果を用いて、

J-IR 訪問客の特性と規模を予測する。本研究は J-IR の需要予測に関する初めての報告書であり、今後 J-IR のアクションプランに役立つことを期待したい。

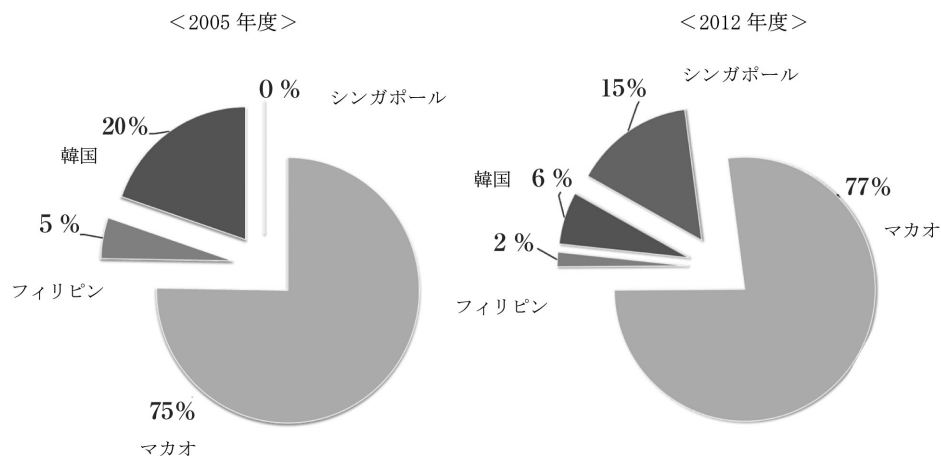
2 . アジア IR の現況と動向

2.1 アジア IR の現況

アジアにおいて IR を持つ国はマカオ、シンガポール、フィリピンの 3 ヶ国である。マカオ IR（以下 M-IR）は、世界カジノのメッカであるラスベガスの売上額を既に追い越し、カジノ大国に浮上した。こうした結果はアジアカジノマーケットへの関心を高め、各国はその推移を注目している。モラル国家であるシンガポールも IR（以下 S-IR）を軟着陸させ、3 年という短い間に国家経済を活性化させ、IR の概念を一層広げた。一時期、カジノ産業が繁盛したフィリピンも IR（以下 P-IR）に乗り換え、アジアにおける IR 主要国になっている。

図 1 はアジア主要国のカジノ売上額の 2005 年と 2012 年のシェアである。M-IR のシェアをみると 75% から 77% に成長したが、2010 年に S-IR が建設する前までは 80% 台を維持していた。S-IR は 2012 年には 15% を占有し、ラスベガスの売上額も追い抜く勢いにまで成長している。一方、アジアではマカオと比べ韓国やフィリピンの売り上げが減少している。2005 年の韓国とフィリピンの比重はそれぞれ 20% と 5% だったが、2012 年に

図 1 アジア主要国のカジノ売上額のシェア



はそれぞれ 6 % と 2 % と減少している。IR を持つ国の実績が上昇する一方、韓国はカジノ施設のみで比重が減少している。フィリピンは 2010 年に IR に転換してから実績が上がる傾向が顕著になり、2 % 台を維持している。IR 建設が終わる 2 - 3 年後にはシンガポールを追い越す見通しである。

表 1 マカオの入国データ

年度	総入国者 (人)	アジア数 (人)	占有率 (%)
2005	18,711,187	18,283,450	97.7
2006	21,998,122	21,486,018	97.7
2007	27,003,370	26,267,881	97.3
2008	22,933,185	22,161,747	96.6
2009	21,752,755	21,060,715	96.8
2010	24,965,411	24,273,409	97.2
2011	28,002,279	27,287,076	97.4
2012	28,082,292	27,356,924	97.4

出所：マカオ統計庁(2012)から抜粋整理。

2.2 各国の入国データ

アジア地域の経済成長に伴って中産階層の国際観光への欲求が促進され、域内の移動が活発になった。中でも IR は新しい観光資源として国際観光客を誘引している。M-IR が東北アジア、S-IR が東南アジアからの観光客で繁盛している。今まで国際観光のマーケット規模が小さかったフィリピンも P-IR が完成されれば東北・東南アジアの両マーケットに大きな影響を及ぼすと予想される。

表 1 はマカオの入国データである。2012 年の総入国者数は 2,800 万人余りで 2005 年の 1,871 万人に比べ 49.7 % も増加した。わずか 6 年で 1 千万人も増えた。マカオは人口 58 万 2 千人(2012 年)の小都市でアジア地域の需要が 97 % 台を占めている。特に、中国系の訪問者が多い。

表 2 はシンガポールの入国データである。2005 年から 2009 年までは S-IR がなく、国際観光客が減っていく傾向であった。2008 年と 2009 年の低迷はリーマンショックによる世界経済不況の影響である。2010 年は S-IR が完成した年で、以降は伸張傾向を見せている。不況が続いた後の急増は当然の結果であるものの、シンガポールにとって IR は国際観光を飛躍させる契機となった。2005 年に比べ 62.0 %、555 万人が増え 1,450 万人が入国し、

表 2 シンガポールの入国データ

年度	総入国者 (人)	アジア (人)	占有率 (%)
2005	8,943,029	6,507,676	72.8
2006	9,751,141	7,110,324	72.9
2007	10,284,545	7,477,083	72.7
2008	10,116,054	7,234,406	71.5
2009	9,682,690	6,894,461	71.2
2010	11,641,701	8,678,618	74.6
2011	13,171,303	10,039,121	76.2
2012	14,491,185	11,073,776	76.4

出所：シンガポール統計庁(2012)から抜粋整理。

国際観光客があふれる町に戻った。こうした結果は IR の影響といっても過言ではない。アジア人の比重も増え、2010年には74.6%、2011年には76.2%、2012年には76.4%と毎年増続けている。

表3 フィリピンの入国データ

年度	総入国者 (人)	アジア (人)	占有率 (%)	フィリピン* (人)	除外時 (%)
2005	2,623,084	1,477,442	55.1	528,493	70.5
2006	2,843,345	1,605,141	56.5	567,355	70.5
2007	3,091,993	1,738,976	56.2	578,983	69.2
2008	3,139,422	1,704,413	54.3	578,246	66.6
2009	3,017,099	1,552,352	51.5	582,537	63.8
2010	3,520,471	1,960,819	55.7	600,165	67.1
2011	3,917,454	2,286,441	58.4	624,527	69.4
2012	4,272,811	2,478,037	58.0	652,626	68.5

出所：フィリピン観光庁（2012）^{7）}抜粋整理。

表3はフィリピンの入国データである。P-IR が一部完成した2010年以降の増加が明確に見える。2012年の入国数は2005年に比べ62.9%増加し165万人増えた。入国者数は他国に比べ少ない中で増加率は高い。国際観光産業の低迷状況にあっ

たフィリピンがIR 建設で回復しつつある。IR の追加建設によって発展は加速すると予想される。ちなみに、アジア諸国の占有率が50%台であり、一見すると低くみえる。その理由はフィリピン系米国人（*）の帰国需要が含まれるからであり、これを除けばアジア諸国は70%近い。

2.3 IR とアジア諸国

アジア諸国が導入した IR は近隣国に影響を及ぼし、周辺国にも拡大していく推移をみせている。表4はマカオに入国するアジア主要国の人々のデータである。中国系が90%以上を占めていることが特徴である。地理的に容易な接近性で中国本土からの流入が持続的に増加しているためである。次は香港、台湾で、最近は中距離の国家にも影響を及ぼしている。

表4をみると、5ヶ国の占有率は2005年の95.9%から2012年92.2%へと約4%減った。東南アジアからの観光客が流入し始め、2005年と2012年を比較すれば3倍から8倍までに上昇した。マレーシアが98,450人から301,802人、シンガポールが82,298人から

ジャパン IR と国際観光の需要特性と規模予測

205,692人、フィリピンが93,878人から209,084人、インドネシアが46,154人から301,802人、タイが57,876人から231,195人、インドが20,846人から150,825人に増えている。アジアにおける IR は新しいマーケットを開拓するツールとして機能している。

表 4 マカオ入国のアジア主要国

年度	アジア入国	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	占有率・合計
2005	18,711,187 (人)	中国(55.9%)	香港(30.0%)	台湾(7.9%)	日本(1.2%)	韓国(0.9%)	95.9%
		10,462,966	5,614,892	1,482,483	220,190	162,709	17,943,240
2012	28,082,292 (人)	中国(60.2%)	香港(25.2%)	台湾(3.8%)	韓国(1.6%)	日本(1.4%)	92.2%
		7,081,153	1,072,052	444,773	395,989	25,896,466	16,902,499

出所：マカオ統計庁から抜粋整理。

表 5 はシンガポールに入国するアジア主要国の人々のデータである。アジア地域が全体の70%台を占めている。中でも主要 5 国の占有率が40%半ばで、近隣国のインドネシアが一番多く2005年の181万人から2012年の284万人に増え、20%近くを占めている。次は中国で2005年に比べ倍増し、その増加率はインドネシアを上回っている。2015年頃には中国が 1 位になると思われる。中国人がアジア IR で主要な顧客になっていくのである。また、隣接国のマレーシアの増加率は113%でかなり目立っている。また、オーストラリアからも急増し、日本と韓国からも増加傾向である。アジア諸国が等しく増加することが S-IR の特徴であろう。中国本土に重点を置く M-IR とは違ったスタイルに発展している。

表 5 シンガポール入国のアジア主要国

年度	アジア入国	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	占有率・合計
2005	6,507,676 (人)	インドネシア(27.9%)	中国(10.1%)	日本(0.9%)	マレーシア(0.9%)	タイ(0.6%)	40.4%
		1,813,569	857,814	588,206	577,987	379,040	4,216,616
2012	14,491,185 (人)	インドネシア(19.6%)	中国(14.0%)	マレーシア(0.9%)	インド(0.6%)	フィリピン(0.4%)	44.4%
		2,837,404	2,033,388	1,230,813	894,586	544,449	6,432,840

出所：シンガポール観光庁（2012）から抜粋整理。

表 6 はフィリピンに入国するアジア主要国の人々のデータである。アジア地域の占有率が全体の70%台（フィリピン系米国人を除外）を占めている。中でも主要 5 ヶ国が80%以上で韓国人41.6%、日本人16.7%、中国人10.1%、台湾人7.9%、香港人4.8%。最大の観光客が韓国人であることは意外である。私見では航空路線と深い関係があると

思われる。1970年代後半マニラ～ソウル～ロサンゼルス路線が開設された。当時国民の海外旅行が不自由であったため、フィリピン系移民者と米軍の家族を運んだ。米会社も就航ラッシュでソウル～マニラ間の価格競争が激しくなり、英語研修ツアーが多いことも主な背景である。またフィリピンカジノとの関係もあげられる。フィリピン航空の韓国支社によると、週末にはカジノ客で満席に近くなるという。こうした需要を狙ったLCCの就航も目立つ。国際観光においては、一般的に需要が供給を創り出すが、今度は供給が需要を創り出すケースになる。つまり、IRが新しい観光資源として新しいマーケットを開発していくのである⁹⁾。

表6 フィリピン入国のアジア主要国

年度	アジア入国	1位	2位	3位	4位	5位	占有率・合計
2005	1,477,442 (人)	韓国(33.1%)	日本(28.1%)	台湾(8.3%)	中国(7.3%)	香港(7.3%)	84.1%
		489,465	415,416	122,946	107,456	107,195	1,242,478
2012	2,478,037 (人)	韓国(41.6%)	日本(16.7%)	中国(10.1%)	台湾(7.9%)	香港(4.8%)	81.1%
		1,031,155	412,474	250,883	196,008	118,666	2,009,186

出所：フィリピン統計庁（2012）から抜粋整理。

IR国への入国者数が増えた背景には当然IRと関係があると推定される。世界的な経済不況の反動としての高い増加率ではあるが、その推移を調べればIRの存在は大きいといえる。マカオの場合は中国本土を含んだ香港、台湾の中国系が高い比重を占めている。シンガポールの場合はインドネシアと中国、そしてマレーシアの比重が高い。後発のフィリピンの場合、韓国と中国が増えている。つまり、J-IRにも韓国と中国、そして台湾、香港が大きな影響を与えることは明白である。

ここで、日本と韓国を訪問する主要国の詳細をみることにする。日本の場合はJNTO（2013年推定）¹⁰⁾によれば訪日客の中でアジアが76.8%を占めている。中でも韓国が32.6%（266万人）と一番多い。次が台湾で28.3%（224万人）、中国15.23%（120万人）で東アジア3国が77.1%を占めている。韓国と中国は外交状況によってその増減が激しく変動するが、今後も増えると考えられる。韓国の場合は文化観光研究院（2013年推定）¹¹⁾によれば訪韓客の中でアジアが約80%台を占めて、中でも中国36.0%（451万人）が一番多い。次が日本で22.5%（227万人）である。中国が前年比59.1%増、日本は25.5%減で、中国人の観光ディスティネーションになっている。カジノ利用客も中国

が40.7%で日本（33.0%）を追い抜いた。こうした状況から中国人マーケットの拡大がK-IRの建設を急ぐ背景となった。

2.4 アジア IR の展望

PWC（Prince Waterhouse Cooper, 2011）²⁾によれば、アジア地域のカジノ売上額（表7参照）は2006年から2015年までの平均増加率が18.3%で、2015年には800億ドルに達する見通しである。中でもフィリピンは20%台の高成長率が予想される。今後、新しいIRが完成されればアジアのカジノマーケットは変化するに違いない。一方、カジノ単一施設の韓国は2015年までマイナス成長とみている。

表7 アジア地域のカジノ売上額 (US\$ 百万)

区分	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	年平均
売上額	13,687	17,714	21,379	22,898	34,280	47,042	58,124	66,961	73,249	79,266	-
増減率	16.3	29.4	20.7	7.1	49.7	37.2	23.6	15.2	9.7	7.9	18.3
マカオ	7,049	10,335	13,541	14,860	23,447	34,608	44,862	52,553	57,680	62,167	21.5
シンガポール	-	-	-	-	2,827	4,396	5,090	5,784	6,516	7,172	20.5
フィリピン	515	565	602	593	558	618	719	941	1,102	1,217	16.9

出所：PricewaterhouseCoopers LLP, Wilkofsky Gruen Associate から抜粋整理。

2.4.1 IR 3 国

(1) マカオの M-IR

マカオは世界1位のカジノ都市であり、主要観光ディスティネーションとして変貌している。特別行政区長官は、カジノゲーミング産業が観光商品として根本的に重要で、近隣国との競争でも優位を占めることができると強調している。今後もIR施設を発展させる計画であるという。マカオカジノ産業は外資の参加でカジノ施設と都市発展に必要な各種インフラを建設してきた。2007年のヴェネチアンマカオ、2007年のMGM グランドマカオ、2009年のシティーオブドリームズ、2010年のギャラクシーマカオ、2012年のサンズコタイセントラルがある。長期的にはWYNN、MGM、SJMDがタイパ島で追加建設する計画でカジノ産業の売り上げの規模はさらに拡大すると予想される。こうしたレジャー施設の拡充によって観光レジャー都市のイメージはさらに強くなる。今後のM-IRの戦略は中国本土との地理的利点を活かすと思われる。

(2) シンガポールの S-IR

シンガポールは2000年以降から経済成長が鈍化し海外カジノへ行く人も増えて、2010年に国家経済の活性化と国際観光産業の回復のためにカジノを合法化した。2010年にリゾート ワールド セントーサとマリナベイサンズがオープンし、初年の国際観光客は1,164万人で最大を記録した。翌年も2011年1,317万人、2012年1,449万人と持続的に増えた。近隣国のインドネシアからの流入が最も多く、中国も成長率が非常に高いことが特徴である。追加建設の計画はないとみられるが、今後の S-IR 戦略は中国の南部地域、南アジア、中東地域からの顧客誘致の拡大であろう。

(3) フィリピンの P-IR

フィリピンはアジアのカジノマーケットで遅れないために IR 建設を急いだ。実はシンガポールより先に計画を立てたが実行が遅れ、2010年にリゾートワールドマニラ (RWM) が一部オープンした。2 - 3 年後には大規模のカジノ複合新都市が開発される予定である。バゴンナヨンフィリピンプロジェクト (Bagong Nayong Pilipino Project) と呼ばれるマニラ湾観光都市計画である。バゴンナヨンは新しい村の意味で IR 新都市の建設。PAGOR (Philippine Amusement and Gaming Corp.、フィリピン娯楽ゲーム公社) が2008年民間企業2社にカジノ開発・運営権限を2033年まで許可した。Belle Grande Project (2013年末) Manila Bay Resorts Project (2016年) Solaire Manila Project (2014年) Resorts World Bayshore (2016年末) が計画されている。IR 新都市は空港から10分の距離で他の IR を持つ国と同じく接近性が良い。RWM のオープンから毎年利用客が増え2013年には日平均35,000人になると予測している。国際観光客の売り上げの構成費は40%であるが、IR 追加建設で倍増する見通しである。中国、台湾、シンガポールの高い成長率を反映すれば、今後の国際観光産業は一層活性化されると思われる。

2.4.2 IR 推進国

(1) 台湾の T-IR

台湾では2019年には最初のカジノができる。実は2009年1月に澎湖列島で合法化されたが、住民の反対で3年間は議論が中止された。IR の重要性を認識した台湾政府は改めて北端の馬祖島に観光特区開発を検討し、2012年7月に住民投票で可決された。中国

南部の福建省と連携する計画で、快速船でわずか20分の距離であるため第2のマカオを目指している。交通部長官も離島の地域発展のためにカジノ産業を育成すべきと主張している。現在2つのカジノを検討して30年間の免許を許可する計画である。

(2) 韓国の K-IR

韓国では2017年まで IR を仁川市永宗島の国際業務団地に建設する計画である。2013年10月パラダイスグループが発表したパラダイスシティプロジェクトである。同グループは国内の外国人専用カジノ16ヶ所中のうち5ヶ所を所有しているカジノ企業の日本セガサミーホールディングス(株)と会社を設立し、現在の仁川空港カジノを買収した。当初は、外国人専用カジノであるため躊躇したが、政府の積極的な外資誘致の動きに決断の時期が迫った。日本や中国と米国が合弁会社を設立して IR プランを韓国政府に提案したのである。しかしこれは、投資不適合とされたが再申請するという¹³⁾。もう世論上で政府は外資導入と地域振興のための規制緩和の方向を取らなければならない状況である。同グループとしてはマーケティング戦略上の先手を打たざるを得なかった。パラダイスシティが立地する永宗島は、仁川空港から直線距離で1.1キロに過ぎない。マカオやシンガポールのように中国とは地理的に有利な条件である。もし2つのカジノが追加許可されると、K-IR は東アジア最大になると思われる。まだ遠い話であるが、国内人が入場できることができればさらに発展するのであろう。

3 . 理論的背景

3.1 国際観光客のカジノモチベーション

3.1.1 国際観光客とカジノ

カジノは主要な観光資源であり、観光ディステイネーションの開発にとって戦略的な構成要素である (Kim et al, 2002)⁴⁾。AGA (American Gaming Association, 2004)⁵⁾ 調査によれば米国人の83%がカジノをエンターテインメントの形態として認識しているという。83%の中で75%がカジノを観光オプションや地域社会のエンターテインメントに重要な資源であると信じている (Woodruff & Gregory, 2005)⁶⁾。Cook (1992) はカジノが重要なレジャー活動になり、他のレジャー活動と共通性があるとみている。アジアの

国際観光客はカジノを観光ディスティネーションとして重要な資源だと認識している（梁亨恩、2009）⁷⁾。このようにアジア IR 国の実績からみても IR は国際観光の振興策として重要なツールであることがわかった。

梁亨恩は国際観光客を対象に調査した研究（梁、2009）⁸⁾で、訪日客の49.6%が海外カジノを経験して、カジノが観光資源として認識されていることが確認できた（表 8 参照）。「そうである」が51.9%に対して「そうではない」と答えた人は17.1%にすぎなかった。この数値は米国人の認識よりは低い。しかし否定的な回答が少ないことはアジアでもカジノがレジャー活動になりつつあることを意味する。これはアジア地域の経済発展と海外旅行自由化の拡大がその背景にある。この調査でも性別、年齢、学歴で有意な差がみられなかったのである。次は、海外カジノ経験との相関関係を確認した。海外カジノに経験があればあるほどカジノを肯定的にみており、主要観光資源として認識していた。また、海外カジノに好感を持つかについて「そうである」38.8%、日本にカジノができれば行きたいかについて「そうである」35.7%である。つまり訪日客100人中36人が肯定的であることが分かった。この調査結果は訪日客の需要予測に反映するであろう。

表 8 国際観光客の意識研究（梁亨恩、2009）

変数名	項目	構成 (%) (N=129)	変数名	項目	構成 (%) (N=129)	変数名	項目	構成 (%) (N=129)
主要観光資源である	そうである	51.9	海外カジノに好感を持つ	そうである	38.8	日本カジノへ行きたい	そうである	35.7
	分らない	31.0		分らない	34.1		分らない	30.2
	そうではない	17.1		そうではない	27.1		そうではない	34.1

3.1.2 カジノモチベーション

国際観光客の海外カジノに対する経験とカジノモチベーションの関係について、肯定的な認識を示す研究がある。まず、カジノモチベーションの概念は観光モチベーションから導くことができる。Crompton（1977）⁹⁾は観光モチベーションを人間に不安定を起こしたり、緊張状態を発生させる内部的心理要因のニーズとウォンツの動的なプロセスに概念化した。Iso-Ahola（1980）¹⁰⁾は逸脱と追求で概念化し、個人的逸脱・対人的逸脱・個人的追求・対人的追求に分けて考えた（表 9 参照）。

表 9 ISO-Ahola の観光モチベーション理論

個人的 逸脱	自分の正常環境からの逃避	個人的 追求	自分の経験を他人に話す
	日常生活のテンポに変化		自我や自分自身の長所探し
	不気味の克服		新しい物事との出会い
対人的 逸脱	不快な人を避ける	対人的 追求	同じ趣味を持つ人との出会い
	ストレス環境からの逃避		家族および友人との親密感
	他人との相互関係から避ける		新しい友人づくり

この4つの概念はギャンブル・モチベーションと似ている。ギャンブルをレジャーの観点で研究した事例から考えることができる。Chantal et al(1995)²¹⁾は、刺激・知識・達成感・運のテスト・金銭追求などがあるとみている。Cotte(1997)²²⁾は、ギャンブルモチベーションを経験的な消費として、経済的(お金を儲ける)・象徴的(冒険など)・快楽的(快楽追求、自我尊敬など)と大きく3つに分類した。谷岡(1997)²³⁾も、社交活動・余暇活動・ストレス解消・自我追求・スリルと興奮、一攫千金・現実脱出とみている。李忠基(2005)²⁴⁾は日常脱出・社会的認定・挑戦および金銭追求とみている。異なる点はギャンブル性の金銭追求のカテゴリーである。本章では国際観光客のカジノモチベーションを把握した2つの研究事例をあげたい。訪日中に韓国人観光客を調査した梁亨恩(2009)の研究とマカオカジノを経験した中国人観光客を調査したWan(2011)²⁵⁾の研究がある。

(1) 梁亨恩(2009)の研究事例

2008年5月から6月に大阪を訪れた3つの韓国人団体(観光、研修、商用)を対象にアンケート調査した。80人の有効回答を分析に用いた。性別では男73.6%と女26.4%で、短大卒以上が94.5%の高学歴集団であった。因子分析の結果では、金銭追求・自我実現・娯楽指向・日常脱出・社会化の5つカテゴリーが確認された。中でも、金銭追求は信頼係数が最も高かった。前述した先行研究と同じ結果である。次は回帰分析の結果で、一つ目は「国際観光客が海外カジノを肯定的に認識する」がカジノモチベーションの中で「社会化(友人と同行、冒険とリスク)のカテゴリー」と統計的に有意であった。二つ目は「カジノを主要な観光資源として認識する」がカジノモチベーション中で「娯楽志向と社会化のカテゴリー」と統計的に有意であった。三つ目は「日本にカジノ

ができれば訪問する」がカジノモチベーションの中で、「娯楽志向と社会化のカテゴリー」と統計的に有意であった。

(2) Wan (2011) の研究事例

2010年7月にマカオを訪れた中国人観光客を対象に調査した。目的が観光で12ヶ月以内にカジノ経験を持つ人で、中でも必ずカジノを訪問する予定者を選び調査した。402人の有効回答を分析に用いた。性別では男67.4%と女32.6%で、短大卒以上が59.1%で比較的高学歴集団であった。但し、カジノモチベーションについては因子分析ではなく、事前に4つのカテゴリー（勝利感、挑戦、社会学習、脱出）を定めてから複数回答の形式をとっている。その中で、「お金を取るために」と「挽回のために」が最も多い。こうした結果は、他の研究で確認された金銭追求のカテゴリーに分類される。複数回答で一番多くみられたことは因子分析での結果も同じであろう。次に挑戦とリスクが多く、これは自我実現のカテゴリーに該当する。興奮と楽しむは娯楽志向のカテゴリーと分類できる。何か新しいものを求めて友人と一緒に参加することは社会化のカテゴリーである。日常脱出のカテゴリーは低いレベルで分布していた。Wanの調査は梁亨恩の研究と同じく娯楽志向と社会化を発見した。これは国際観光客が持つ共通のカテゴリーである。つまり、IRを訪問する国際観光客が持つカジノモチベーションには金銭追求以外に「娯楽志向」と「社会化」のカテゴリーがあるということである。カジノがレジャー活動に変化していく進行形という点から国際観光客の受け入れ戦略の念頭に置く必要があると考えられる。

3.2 観光需要の予測技法

3.2.1 観光需要

観光需要とは、観光商品や観光サービスに関する観光者の欲求水準を意味する。観光需要を測定するためには、参加を希望する人数と観光地の数で測定することができる。需要を予測する主要目的は、開発計画の中で確率的に未来に起きる需要の最高水準を推定することである。そして、政策決定の効率性の向上・産業戦略方向の設定・ターゲットマーケットの設定などの経済におよぶ影響を予測し適正供給およびインフラ計画に活用する。そのために基本的に訪問者の意思決定という内部要因を分析する。内部要因には個人特性、モチベーション、認識と態度などの心理的要因がある。次は外部要因で、

価格（物価、交通費、為替レートなど）とアクセスの度合によって影響を受ける。特に、国際観光客には航空運賃と便数によって大きく左右される。地域間の LCC（低価格航空会社）運航ラッシュも肯定的な影響を及ぼすことである。

3.2.2 予測技法

一般的に、需要予測技法には大きく量的技法（quantitative technique）と質的技法（qualitative technique）と、結合技法（combined technique）がある。

(1) 量的技法

時系列モデル（time-series model）と因果モデル（casual model）がある。時系列モデルには、移動平均法（moving average method）・指数平滑モデル（exponential smoothing model）・ARIMA モデル（auto-regressive integrated moving average model）がある。まず、移動平均法は単純な予測技法で、過去の年度別・月別・分期的データを連続的に算術平均して予測する方法で短期予測に活用される。次の指数平滑モデルは過去の観測値を指数に加重平均して観光需要を予測する方法で中期予測に活用される。そして ARIMA モデルは時系列モデルの適合性を検証して判断する方法で短期予測に活用される。

因果モデルには、回帰モデル（regression model）と重力モデル（gravity model）がある。また回帰モデルには、単純回帰モデルと多重回帰モデルがある。まず、多重回帰モデルは独立変数と従属変数間の因果関係を究明するのに論理的長所がある。先行研究で観光需要に影響を及ぼす要因は所得、物価、為替レートがあるが、中でも個人所得は内部要因で観光需要予測のために主要変数になる。こうした多重回帰モデルは研究目的で活用される。つまり、多重回帰モデルは独立変数が従属変数に如何なる影響を及ぼすかの因果関係モデルであり、個人の収入と費用の関数を通じて使用金額を予測することができる。本稿では需要に関する特性と規模に絞ったため、次回の研究テーマとしておきたい。

次に、重力モデルは回帰モデルと似ているが観光客の居住地（origin）と観光目的地（destination）間の距離や旅行時間が観光客の移動に及ぼす影響を考慮する。ある居住

地から観光地まで旅行の回数は居住地の人口数と観光地の魅力度に比例し2つの地点間の距離や時間に反比例することを示す。重力モデルは旅行誘発モデル (trip-generation model) と旅行配分モデル (trip-distribution model) に分けられる。旅行誘発モデルは居住地から発生する旅行の回数を分析することに重点を置き、旅行配分モデルは総観光移動量が各観光地で配分されるプロセスを分析することに重点を置く。このモデルは中期予測に活用するが、時間と費用が多くかかるために、回帰モデルが研究に用いられる頻度が高い。

(2) 質的技法

シナリオ設定法、デルファイモデル (Delphi model) 判断技法、事例分析方法がある。観光客数に関する過去の資料が不十分で信頼できなく、観光関連分野に急激な変化が予想されることにより量的技法を使い困難な場合に使われる。シナリオ設定法は予想される様々なシナリオを設定して未来を予測することである。デルファイモデルは専門家の意見を参考にする技法で個人経験に依存する。理論的背景が微弱で数値が概括的であるため、その正確度が落ちる。判断技法も専門家の意見を参考にするが一致する部分のみで予測する方法である。事例分析法は似ている地域の事例を用いて分析する地域の推移を予測する方法である。3つの方法は長期予測に利用されることが多い。

(3) 結合技法

予測技法がそれぞれ異なる理論的な背景と仮定の下で予測するために、その結果にも多少の差が生じる。一つよりも二つ以上を結びつけた方がより多くの情報と経験が得られ、その正確度を向上させることができる。2つ以上の計量モデル、計量モデルと質的モデルを結合した形態に分けられる。一般的に国際観光客の需要は量的技法の時系列データで予測した後、質的技法で補完するケースが多い。

3.2.3 Gruber 指数

特定時点の特定観光地を訪問する外国人観光客の需要を推定するために、アンケート調査なども行なう。しかし潜在観光客の意思は特定地域の未来訪問に対して楽観的に答える傾向があり、過大予測をする恐れがあると指摘されている。その結果を盲信すると供給施設に対する過剰投資を誘発する可能性が高い (李忠基、2003)²⁶⁾。こうした結果

値を調節する理論が Gruber (1970)²⁷⁾ 指数である。

新製品に対する消費者の購買意思について実現率を調査した結果であり購買意思の100%が実現されるのではなく、「必ず購入する」という積極的な意思の75.5%、「若干購入する」という中立的な意思の31.4%が実際に購入することが分かった。こうした Gruber 指数を観光需要に活用すれば、予測の楽観的と保守的な結果がでる。李忠基 (2003) は、観光分野に適用して過大予測を防止し実現可能な予測値を推定する有効な理論であるとみている。本稿では Gruber 指数を用いて需要予測する。

$$\text{Gruber指数 (実行率)} = (\text{積極的訪問意思} \times 75.5\%) + (\text{中立的訪問意思} \times 31.4\%)$$

4. 調査結果の分析

2013年度の訪日外国人は10,313,902人(10月推定)で、アジアが76.4%(7,921,092人)を占めている。その内訳は韓国33.6%(2,661,736人)、台湾28.3%(2,241,136人)、中国15.2%(1,204,210人)と東アジアからが77.1%を占めている。今後のJ-IRにおいても韓国、台湾、中国の比重が多いと思われる。本稿では、占有率が一番の韓国人を対象に需要予測をする。こうした予測は台湾や中国側、つまり供給サイドの需要予測にも参考になるとと思われる。

本調査は、韓国カジノ業観光協会の依頼で韓国慶熙大学の李忠基教授と共同研究した結果の2次研究である。2010年9月インチョン空港と金浦空港の海外出国者、そして内国人の出入可能なカンウォンランドカジノの訪問者の2つ集団を対象にアンケート調査を行った。本稿ではその2次データを用いてJ-IRに訪れる需要の特性を、そして需要予測技法を用いて規模を予測してみたい。

4.1 調査結果

4.1.1 海外出国者

区分	頻度	比率
男性	632人	56.8%
女性	480人	43.2%
合計	1,112人	100.0%

2010年9月17日(金)から9月26日(日)までの10日間に、インチョン空港と金浦空港で海外出国客を対象に調査した。対面調査を行ない1,120枚の有効回答を分析に用いた。性別では男性56.8%、女性43.2%で男性の比率が多少高い。

年齢は20代(35.4%)と30代(28.0%)が主流で40代17.7%、50代以上19.0%。学歴は短大卒以上が88.0%で高卒以下は12.0%であった。月収入は200-399万ウォン台が全体の39.1%を占めた。100万ウォン未満は19.5%、100-199万ウォンが13.8%、400-599万ウォンが18.7%、そして600万ウォン以上は8.9%であった。出国者の67.1%が観光を主目的と答えた。次が商用14.8%、会議9.7%の順であった。

区分	頻度	比率
観光	751人	67.1%
商用	166人	14.8%
会議	108人	9.7%
公務	26人	2.3%
宗教	33人	2.9%
その他	35人	3.2%
合計	1,119人	100.0%

そして質問項目については、1つ目はカンウォンランドカジノを訪問した経験があるかで、2つ目は海外カジノを訪問した経験があるかの2点であった。前者は20.8%、後者は29.8%の人々が「あり」と回答した。海外出国者の10人中3人はカジノ経験があった。次に、カジノに対する認識は27.2%が肯定、40.6%が否定、32.2%が中立であった。カンウォンランドカジノや海外カジノ利用経験を持つ人であればあるほどカジノに関して肯定的に認識していた。

これは梁亨恩(2009)²⁸⁾の国際観光客のカジノに対する認識調査と同じ結果である。つまり、国際観光客はカジノを主要な観光資源として認識しているのである。一方、否定的な認識が多いのは外国人専用カジノの歴史やカンウォンランドカジノのイメージが大きな原因であると思われる。二つ目はJ-IRへの訪問意思を聞いて海外出国者の23.6%が訪問したい意思を確認した。中には年2回以上は訪問したいと答えた人もいた。この23.6%のうちカンウォンランドカジノ経験者が44.7%を占めていた。ちなみ

に、韓国にカジノ（K-IR）を認めるかについては、「IR であれば」57.1%、「日本や台湾で IR ができたら」20.0%と IR を支持する声が多い。こうした結果はアジア IR によって形成された肯定的なイメージのためであると思われる。

4.1.2 カンウォンランドカジノの訪問者

区分	頻度	比率
男性	317人	60.7%
女性	206人	39.3%
合計	523人	100.0%

2010年9月2日(木)から9月4日(土)までの3日間にカンウォンランドカジノで調査した。523人の有効回答を分析に用いた。調査期間を平日に定めた理由はカジノを主目的に訪問する顧客が多いためである。性別では男性60.7%、女性39.3%で、年齢は30代21.6%、40代28.9%、50代34.2%で4-50代が主流であった。20代は4.2%、70代は0.6%を占めた。学歴は短大卒以上が64.6%で高く、高卒以下が33.7%であった。月平均所得は200-399万ウォン（約18万円-35万円）が34.7%で主流であり、200万ウォン未満は26.1%であった。

・カジノ目的の訪問

区分	頻度	比率
はい	260人	49.7%
いいえ	263人	50.3%
計	523人	100.0%

次に、質問項目については、J-IR への訪問意思を聞いた。半分近い49.7%がカジノを目的に訪問する意思が確認された。今までにこのカジノを訪れた回数は、1-4回が46.5%、5-9回が18.5%、10-19回が22.4%であった。ちなみに、カンウォンランドカジノでは出入り

日数を制限している

²⁹⁾。そのためこれに

対する質問項目を追

回数	1-4回	5-9回	10-19回	20-49回	50-100回
N = 260	121	48	57	22	12
比率	46.5%	18.5%	22.4%	8.5%	4.6%

加した。入場制限された場合22.4%の人が海外カジノを利用すると答えた。実際に回答者の内6.0%が制限された経験があり、海外カジノを利用したと答えている。厳しい制限政策のために海外カジノへ行く利用者が多くなったという。このことがJ-IRを訪問する意思を持つ人々が49.7%もいる背景となっている。

4.2 回帰分析の結果

4.2.1 海外出国者

表10は韓国人海外出国者の日本カジノを利用意思に影響を与える変数である。カジノについての肯定的認識はカジノ経験の有無によって左右されることが確認された。つまり、カジノに対する認識が肯定的であるほど、日本カジノへの利用意思が高いことを意味する。調査時点ではまだIRの実績が顕著ではなかったため、現時点であればより肯定的な認識を持っていると考えられる。

表10 海外出国者とカジノ認識

変数	推定係数	標準偏差	Wald 値	有意確率	Exp(B)
カジノ認識	1.08	0.136	62.981	0.000	2.946
常数	-4.949	0.482	105.580	0.000	0.007
R-square : 0.298					

4.2.2 カンウォンランドカジノの訪問者

表11 J-IR 訪問と性別、目的

変数	推定係数	標準偏差	Wald 値	有意確率	Exp(B)
性別	-0.627	0.212	8.770	0.003	0.534
所得	-0.291	0.090	10.456	0.001	1.337
カジノ目的	-0.527	0.223	5.592	0.018	0.590
常数	0.784	0.542	2.091	0.148	2.190
R-square : 0.216 p>0.05					

表11は、カンウォンランドカジノの訪問者が日本カジノを利用する意思に影響を与える変数である。性別、所得、カジノ目的との関係を検証した。男性で、カジノが主目的で、月平均所得が高いほど、日本カジノの利用意思が高いことが分かった。これらの変数は、日本のカジノ需要を決定する重要な要因であり訪問者の特性として理解すべきであろう。

4.3 訪日客と IR 需要の予測

4.3.1 総出国者と訪日客

(1) 海外出国者（総出国者）

表12 韓国の出国者データ（2000—2018）

年度	総出国者数(人)	増減率 (%)	成長率 (%)	年度	総出国者数(人)	増減率 (%)	成長率 (%)
2000	5,508,242	26.9	実測値	2010	12,488,364	31.5	同
2001	6,084,476	10.5	同	2011	12,699,733	1.7	同
2002	7,123,407	17.1	同	2012	13,736,976	8.2	同
2003	7,086,133	-0.5	同	2013	14,830,000	8.0	予測値
2004	8,825,585	24.6	同	2014	15,588,000	5.8	同
2005	10,080,143	14.2	同	2015	16,563,000	5.6	同
2006	11,609,879	15.2	同	2016	17,461,000	5.4	同
2007	13,324,977	14.8	同	2017	18,380,000	5.3	同
2008	11,996,094	-10.0	同	2018	19,317,000	5.1	(*)
2009	9,494,111	-20.9	同	-	-	-	-

出所：韓国観光公社（2012）「訪韓観光市場分析」³⁰⁾（*）2018年度は以前3年間の推移から5.1%に予測。

表12は韓国観光公社（2012）³¹⁾が予測した韓国人海外出国者のデータである。2014年から予測値5.8%を適用し2018年には19,317,000人³²⁾になると予測している。J-IR オープン時期は法案が通ってから5年、早ければ2018年以後から2020年東京オリンピック以前の間と考えられる。本稿では2018年を基準に予測するが2020年に時点をとって数値は変わらないと思われる。ちなみに2012年と2013年の増加は2011年から週5日勤務制度が全面に導入された結果で2014年からは代替休日制度が始まればより増えると思われる。

(2) 海外出国者（訪日客）

J-IR への需要を予測するために、訪日客の動向について把握する必要がある。J-IR は近隣国の韓国に一番大きい影響を及ぼすことは明白である。総出国者からはJ-IR への潜在需要が、訪日客からは実需要が把握できると思われる。表13に見るように2005年から2013年までの訪日客の時系列平均の成長率は8.0%³³⁾であり、総出国者の5.8%を上回っている。また訪日客が総出国者の17.4%を占めていて、9年間の流れをみると最

表13 韓国からの訪日客データ

年度	訪日客数 (人)	増減率 (%)	出国者の 占有率(%)
2005	1,747,171	-	17.3
2006	2,117,325	10.0	18.2
2007	2,600,194	21.2	19.5
2008	2,382,397	- 9.4	19.9
2009	1,586,772	-33.4	16.7
2010	2,439,816	53.8	19.5
2011	1,658,073	-32.0	13.1
2012	2,042,775	23.0	14.9
2013	2,661,736	30.3	17.7
平均	-	8.0	17.4

低13.1%から最高19.9%である。ちなみに、統計はJNTOのデータからとった。理由は2006年8月から出入国の簡素化政策で目的地を把握できなくなったためである。

前述したように2014年から代替休日制が始まり、安近短の日本旅行需要が増えると思われる。2012年から2013年にかけて、両国間の不安な状況でも（韓国人が）増えたことから今後も増加が続くと思われる。しかし、空港スロット（発着枠）で制限された運航回数に

よりその成長率の幅は大きくないと考えられる。

そのためには、訪日客の年間成長率と総出国者の占有率を調整する必要がある。表14は訪日客の増加率8.0%を適用した結果と総出国者の増加率17.4%を適用した結果との調整値である。

表14 韓国からの訪日客データ予測

年度	増減率(8.0)適用		占有率(17.4)適用		調整人数 (a + b) / 2
	訪日客数 (a)	占有率 (%)	訪日客数 (b)	増減率 (%)	
2014	2,874,674	18.0	2,774,502	4.2	2,824,588
2015	3,104,647	18.3	2,946,521	6.2	3,025,583
2016	3,353,019	18.7	3,129,205	6.2	3,241,112
2017	3,621,260	19.2	3,276,278	4.7	3,448,769
2018	3,910,961	19.8	3,430,263	4.7	3,670,612

つまり、2018年度には訪日客が370万人に到ると思われる³⁴⁾。本研究では調整値の3,670,612人を基準に規模を予測する。

(3) カンウォンランドカジノ

韓国人が出入りの可能なオープンカジノである。ソウルから車で3時間30分の遠い距離で一日平均8,380人が訪れる（表15参照）。2012年6月にホール面積を2倍に増やし、ARS（自動応答システム）で入場の順を決める制度、テーブル席の予約制度などで同時に入場しないようにコントロールしている。さらに、ギャンブル機器の供給も制限し

ジャパン IR と国際観光の需要特性と規模予測

表15 カンウォンランドカジノ訪問者データ ている。

年度	訪問者(人)	増減(%)	日平均(人)
2009	3,044,972	-	8,342
2010	3,091,209	1.5	8,469
2011	2,983,440	-3.5	8,174
2012	3,024,511	1.4	8,286
2013	3,157,590	4.4	8,627
平均	-	1.0	8,380

こうした背景から、年間平均成長率も1.0%に留まっている。2018年度の算出でも1.0%以上の成長は無理であり、2013年の実績を大きく上回ることもないと思われる。一日平均9,000人を最大にみてもよい。2018年の訪問客は平均率

1.0%を適用すれば、3,318,659人で、一日平均9,000人を適用すれば3,285,000人になる。本研究では、2つの平均値である3,301,830人を基準に予測する。

4.3.2 J-IR 需要の予測(2018年)

(1) 海外出国者

調査で確認されたJ-IR訪問意思を持つ韓国人23.6%を楽観的予測に反映し、保守的予測は実現率のGruber指数を用いる。そのためには積極的意思と中立的的意思を表す数値を次のような考えで分析した。調査対象の中にはカンウォンランドカジノの経験があると答えた人が重なるために、この数値を省いてから純粋利用者を推定する。まず、海外カジノ経験の29.8%に訪問意思23.6%を反映した7%を積極的意思に、中立的的意思には訪問意思を持つ人々23.6%に積極的意思の7.0%をマイナスした16.6%を適用した。

積極的訪問意思(7%)×Gruber指数(75.6%)=5.3%、中立的訪問意思(16.6%)×Gruber指数(31.4%)=5.2%の合計10.5%を実現率とした。一方、海外出国者の調査では(254ページ参照)カンウォンランドカジノの経験が20.8%であった。これを除いて純粋利用者を算出した後、カンウォンランドカジノで予測した数値を合

表16 J-IR 需要の予測(海外出国者)

総出国者	楽観的予測(23.6%)			保守的予測(10.5%)		
	23.6%	経験20.8%	純粋利用者	10.5%	経験20.8%	純粋利用者
19,317,000	4,558,812	948,233	3,610,579	2,028,285	421,883	1,606,402
計算式				Gruber 指数	実現率	
積極的訪問意思 29.8%(海外カジノ経験)×23.6%=7.0%				75.5%適用	5.3%	10.5%
中立的訪問意思 23.6%(設問調査)-7.0%=16.6%				31.4%適用	5.2%	

算し、次のような結果が導かれた（表16参照）。

すなわち、韓国人の海外出国者19,317,000人（2018年）のうち、18.7%（楽観的予測）の3,610,579人、8.3%（保守的予測）の1,606,402人がJ-IRの潜在需要規模である。一方、実質的な年間値は訪日客の調査結果から予測する必要があると思われる。

（2）訪日客

表8（248ページ参照）の設問調査で確認されたJ-IR訪問意思を持つ韓国人35.7%を楽観的予測に反映し、保守的予測は実現率のGruber指数を用いた。そのために積極的意思と中立的意を表す数値を次のような考えで分析した。調査対象の中にはカンウォンランドカジノの経験があると答えた人が重なるために、経験者9.3%（梁の調査結果）を省いてから純粋利用者を推定する。まず、海外カジノ経験49.6%（248ページ、梁の研究参照）に訪問意思の35.7%を反映した17.7%を積極的意思に、中立的意には訪問意思の35.7%に積極的意思の17.7%をマイナスした18.0%を適用した。

積極的訪問意思（17.7%）× Gruber 指数（75.5%）＝13.4%、中立的訪問意思（18.0%）× Gruber 指数（31.4%）＝5.7%の合計19.1%を実現率とした。一方、訪日客の調査と海外出国者の調査ではカンウォンランドカジノの経験（9.3%）を聞いた。純粋利用者を算出した後、カンウォンランドカジノで予測した数値を合算し、次のような結果が導かれた（表17参照）。

表17 J-IR 需要の予測（訪日客）

訪日 観光客数	楽観的予測(35.7%)			保守的予測(19.1%)		
	35.7%	経験9.3%	純粋利用者	19.1%	経験9.3%	純粋利用者
3,670,612	1,310,409	121,868	1,188,541	701,087	65,201	635,886
計算式				Gruber 指数	実現率	
積極的訪問意思49.6%(海外カジノ経験)×35.7%=17.7%				75.5%適用	13.4%	19.1%
中立的訪問意思35.7%(設問調査)－ 17.7%=18.0%				31.4%適用	5.7%	

すなわち、韓国人の日本訪問客3,670,612（2018年）のうち32.4%（楽観的予測）の1,188,541人、17.3%（保守的予測）の635,886人がJ-IRの年間需要である。

（3）カンウォンランドカジノ訪問者

訪日客の純粋利用者にカンウォンランドカジノ訪問者の予測値を加えれば年間値が分

ジャパン IR と国際観光の需要特性と規模予測

かる。まず、2018年度の予測には3,301,830人を滞在日数2.6日（カンウォンランドカジノ側の計算）で割ると、実数は1,269,935人になる。調査で確認された J-IR 訪問意思を持つ韓国人49.7%（255ページ、カジノ目的の訪問）を楽観的予測と考え、これに基づき、保守的予測を計算する（実現率の Gruber 指数を用いる）。そのために積極的意思と中立的的意思を表す数値を次のような考えで決める。積極的意思を持つ人は、マカオカジノ経験者14.0%（カンウォンランドカジノでの調査結果）に訪問意思の49.7%を掛けた結果の7.0%と推定し、中立的的意思を持つ人は訪問意思の49.7%に積極的意思7.0%をマイナスした42.7%を適用した。

積極的訪問意思（7.0%）× Gruber 指数（75.5%）＝5.3%、中立的訪問意思（42.4%）× Gruber 指数（31.4%）＝13.5%の合計18.8%を実現率とした。次のような数値が得られた（表18参照）。この数値は、総出国者と訪日客の純粹利用者にプラスして需要予測をする。

表18 J-IR 需要の予測（カンウォンランドカジノ訪問者）

訪問客数 (a)	滞在期間 (b)	実訪問者数 (c=a/b)	楽観的予測 (c * 49.7%)	保守的予測 (c * 18.7%)
3,301,830	2.6	1,269,935	631,158	237,478
計算式			Gruber 指数	実現率
積極的訪問意思 14%(マカオ経験) x 49.7%=7.0%			75.5%適用	5.3%
中立的訪問意思 49.7%(設問調査) - 7.0%=42.7%			31.4%適用	13.4%
				18.7%

すなわち、カンウォンランドカジノの訪問客3,301,830（2018年）のうち19.1%（楽観的予測）の631,158人、7.2%（保守的予測）の237,478人で、この数値を海外出国者（総出国者）と訪日客の予測値に加えて潜在需要と实际需要を考えたい。

(4) 需要予測の結果

総出国者と訪日客から予測した純粹利用者にカンウォンランドカジノの訪問者からの予測値を合算し潜在需要と实际需要の2つが確認できる（表19参照）。総出国者の楽観的予測は4,241,737人、保守的予測は1,843,880人で J-IR に興味を持つ潜在需要である。一方、訪日客の楽観的予測は1,819,699人、保守的予測は873,364人である。これが J-IR を訪問する実需要である。一日で換算すると楽観的には1日4,986人、保守的には1日2,393人が利用する。これに滞在日数を加えれば倍増することが分かる。

表19 J-IR 需要の予測（総合）

区分	楽観的予測			保守的予測		
	カンウオン ランド	J-IR 純粋 利用者推計	合計	カンウオン ランド	J-IR 純粋 利用者推計	合計
潜在需要(総出国者)	631,158	3,610,579	4,241,737	237,478	1,606,402	1,843,880
实际需要(訪日客)		1,188,541	1,819,699		635,886	873,364

この数値を先行国の事例から考えてみたい。シンガポールの CRA（Casino Regulatory Authority）によれば2012年に S-IR は一日17,000人が訪問し、このうち住民（永住者含む）が7.7%を占めている。一日平均14,000人が外国人であることから、5年後に J-IR を利用する予測値としては妥当であると思われる。ちなみに、M-IR も2014年に1日25,000人を目指している³⁵⁾という。

こうした韓国人の訪日客に関する調査結果から、J-IR を訪れる総需要の規模が覗ける。2013年度の訪日客の77.1%が東アジアの韓国、台湾、中国の3カ国が占めている。平均シェアを参考にすれば結果の3倍になると予測することができる。およそ、一日平均15,000人（楽観的予測）と7,200人（保守的予測）である。さらに滞留日数を考慮すれば2倍以上になり、他の国からの22.9%も考えれば、J-IR によって国際観光産業が活性化されることは間違いないと思われる。

ちなみに、J-IR を極大化するためには航空機の運行回数が重要である。日韓間の航空路線（2014年1月基準³⁶⁾）を見ると日75便の中で東京が28便、大阪が15便、札幌が3便、沖縄が2便である。供給席を考えれば韓国（ソウル、釜山、済州島）から東京線（成田、羽田）が約50%で大阪線（関空）が約25%を占めている。こうした航空便状況から韓国、台湾、中国からの推移を参考にすれば、東京の場合は一日平均7,500人（楽観的）と3,600人（保守的）、大阪の場合は3,750人（楽観的）と1,800人（保守的）が予測される。

5. 結 語

アジアにおける IR は国際観光マーケットを拡大させている。IR は供給が需要を創

出するモデルとして高く評価されている。J-IR も同じ結果を予想するのは当然であろう³⁷⁾。こうした背景から J-IR に訪れる国際観光客の特性と規模について調査し次のような結果を得た。

第 1 は、需要特性については、カジノが重要な国際観光資源と認識し、J-IR には肯定的なイメージを持っている。先行研究で確認されたカジノモチベーションの中で、娯楽指向と社会化のカテゴリーとが相関関係である。その変数として楽しみ・興奮・友人同行・冒険・学習などがあげられる。つまり、こうした特性に合わせた IR が国際観光客の満足や再訪問意思に肯定的な影響を与えることである。J-IR は日本ならではのものを作るべきである。東京オリンピックを誘致した際のキーワード「オモテナシ」はその一つであると思われる。また J-IR の概念には日本の伝統文化と歴史も反映すべきである。ちなみに韓国も韓流文化を生かした K-IR を考えている。近年のカジノ産業は IR スタイルに変わり、文化産業にも影響を与えつつある。今後も伝統文化を活かした学習の場として IR が発展するであろう。

第 2 は、需要規模については訪日客の J-IR 訪問意思から総需要の規模を把握し、多くの訪日客が訪れると予測した。国際観光客のための施設やサービスの規模を考える際に参考になると思われる。一方、IR が立地する場所によって需要規模を改めて考えなければならない。マカオ、シンガポール、フィリピンの場合、大都市で空港からのアクセスがいい。韓国もインチョン空港に隣接した所で IR を検討している。つまり、アクセスの良い都心型 IR は国際観光客の吸引力が増大し経済効果も大きくなる。こうした環境下で IR は発展し国際競争力も高められる。

一方、訪日客のカジノモチベーションの中で、金銭追求のカテゴリーが一番の要因として確認された。カンウォンランドカジノ訪問者の49.7%が J-IR 訪問意思をみせている。大半は国内のカジノ出入制限政策で週末に開催される競馬や競輪にも参加するヘビーギャンブラーの性向を持っている。こうした訪日客のギャンブル依存に対する問題も生じると思われる。カンウォンランドカジノ訪問者の場合、J-IR を訪れると予想される韓国人は一日平均1,729人（楽観的）651人（保守的）と予測した。ヘビーギャンブラーに対する政策の検討も視野に入れる必要があるだろう。J-IR においては外国人のギャンブル依存にも関心をもつ政策を提案したい。

李忠基（2014）³⁸⁾は、韓国の外国人専用カジノにおいてギャンブル依存対策を検討する時期がきたと主張している。これは責任あるギャンブル政策の一つである。実際にも S-IR で中長期滞留中の外国人勤労者のギャンブル依存問題が表面上にでた。つまり、IR への国際観光客の拡大は外国人ギャンブル依存を増やしていると思われる。こうした社会現象を踏まえ、J-IR を建設すれば今とは異なるスタイルになる。日本発信で東アジアにおけるギャンブル依存対策の国際ネットワークの形成も考えるべきだろう。

最後に、本研究は J-IR を利用する訪日客の需要を予測した初めての報告書である。海外出国者とカンウォンランドカジノ訪問者の調査に基づいており、推定結果は客観性と妥当性があると思う。しかし、研究の限界は調査時期が2010年であるため直近の IR の成果が十分に反映されていない点である。現時点の調査であれば訪問意思率はより高くなったと思われる、今後の J-IR が国際観光産業を活性化させることや文化産業にも波及効果が大きいことは間違いない。今後の研究に期待したいと考える。

【注】

- 1) Cook, A. A. (1992). "Towards understanding today's changing gaming participants", *Journal of Travel and Tourism Marketing*, 1 (2) 63-70.
- 2) IR はシンガポールのカジノをベースにしたリゾートである。ギャンブル産業を遠回した表現で使われ MICE (Meeting, Incentive, Conference, Exhibition) 産業を強化する戦略上のキーワードとなった。
- 3) カジノは観光産業で重要な産業である (Eadington 1986、Pizam and Pokela 1985、Perdue et al 1995、谷岡 2002、李忠基 2002、梁亨恩 2006)。カジノ産業は一般的に観光産業の中で集客力が高く、観光関連産業にも大きい相乗効果を与える観光サービス業としてカジノ観光 (casino tourism) と呼ばれている。アメリカの TSA 集約表 (Tourism Satellite Account) に「観光特産業と観光関連、その他の産業項目」でレクリエーションサービスとして「産業特性コード 96920」で分類されている。
- 4) 2014年1月28日阿部総理が通常国会で IR の必要性を強調し合法化の可能性はさらに強くなった。
- 5) 梁亨恩 (2006) 『カジノ導入をめぐる諸問題 〈2〉』「アジア地域におけるカジノ産業の現象と展望」、大阪商業大学アミューズメント産業研究所。
- 6) <http://www.dsec.gov.mo/Statistic.aspx?NodeGuid=251baebb-6e5b-4452-8ad1-7768eafc99ed>.
- 7) <http://www.visitmyphilippines.com/index.php?title=VisitorStatistics&func=all&pid=39&tbl=1>.
- 8) <http://www.singstat.gov.sg/publications/publications-and-papers/reference/monthly-digest/mdsdec13.pdf>.
- 9) 2014年1月24日第8回 NPO 依存学推進協議会主催シンポジウムで発表した、マリーナサンズのジョージ・タナシシェビッチ社長も同じ発言をしている。
- 10) <http://www.jnto.go.jp/eng/ttp/sta/>.
- 11) <http://www.tour.kr/ain.asp>.

- 12) Global Gaming Outlook the casino and Online Gaming Market to 2015.
<http://www.pwc.com/gx/en/entertainment-media/publications/global-gaming-outlook.jhtml>
- 13) 2014年1月末現在、米国のシーザースグループ1社が確認された。
- 14) Kim,S.S., Prideaux,B., & Kim,S.(2002). "A cross-cultural study on casino guests as perceived by casino employees". *Tourism Management*, 23 (5), 511-520. ("Increasing Chinese tourist Gamblers in Macao : CrucialPlayer Characteristics to Identify and Exploit" by Penny Yim King Wan の論文から引用) .
- 15) <http://www.americangaming.org/industry-resources/research/state-states>.
- 16) Woodruff, C., & Gregory, S. (2005). "Profile of Internet gamblers: Betting on the future". *UNLV Gaming Research & Review Journal*, 9(1), 1-14 (前掲書から引用) .
- 17) 梁亨恩 (2009) 「国際観光客のカジノモチベーション研究」、大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要。
- 18) 梁亨恩 (2009) 前掲書。「国際観光客のカジノモチベーション研究」、大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要。
- 19) Crompton,J.J.(1977). "Motivation for Pleasure Vacation". *Annals of Tourism Research*, 6;408-24 (Sne penger et al 2006の論文から引用) .
- 20) Iso-Aloha,S.E.(1980) *The Social Psychology of Leisure and Recreation*. Dubuque IA:Brown.
- 21) Chantal,Y., Vallernad,R.J., & Vallerierse, E.F.(1995). Motivation and gambling involvement. *The Journal of Social Psychology*, 136 (6) 755-763.
- 22) Cotte, J.(1997) "Chances, trances, and lots of slots. Gaming motives and consumption experiences", *Journal of Leisure Research*, 29,380-406.
- 23) 谷岡一郎 (1997) 「ギャンブルの社会学」世界思想社、PP4-10。
- 24) 李忠基 (2005) 「カジノモチベーションの尺度開発と妥当性の検証」観光学研究第29巻第2号、PP423-441。
- 25) Wan, P. Y. K.(2011) . "Increasing Chinese Tourist Gamblers in Macao:Crucial Player Characteristics to Identify and Export". *UNLV Gaming Research & Review Journal*, vol15.1.
- 26) 李忠基 (2003) 「観光応用経済」日新社。
- 27) Alin, Gruber.(1970)."Purchase Intent and Purchase Probability". *Journal of Advertising Research* Vol10, 1,February1970.
- 28) 梁亨恩 (2009) 前掲書。「国際観光客のカジノモチベーション研究」、大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要。
- 29) 出入制限は、月15日を超えないで分30日以内である。
- 30) 韓国観光公社 (2012) 「訪韓観光子市場分析」(R & D センター)。
- 31) 韓国観光公社では国際観光需要を予測する方法として時系列予測技法を用いて推定し、回帰分析で調整している。報告書によると海外観光需要と国民総生産 (GDP) 、ウォンと米ドルおよびウォンと円の為替などの変数間の因果関係を分析が必要であると述べている。こうしたプロセスから調整された予測値は短期予測について有意性があるが、中長期予測にはその正確度は落ちることが指摘されている。これは国際観光に影響を及ぼす変数が多く、国際情勢環境の急変や韓国内でのデータ不足などの問題がある。
- 32) 日本の場合、2012年18,490,657人から2013年は-6.6% (1 - 10月増減率) を反映する時、17,270,274人が予想される。
- 33) 日・中のような近隣国の観光客は時系列分析を中心に専門家の意見調査で予測する。
- 34) 韓国文化観光部によれば、日本人の訪韓客数は2012年3,519,000人で、2013年は - 25.5% (1 - 10月増減率) を反映する時、2,652,845人が予想される。日韓関係の冷却が原因であるが、韓国人の訪日客は増加している。
- 35) <http://punto.com.ph/news/printpage/14822>.
- 36) SKY road, 2014.01月号 (韓国発行)。
- 37) 沖縄住民に対するカジノインパクトを調べた研究で、観光客増加が71.1%まで至るとみていた。

38) 2014年2月25日第11回 IR *ゲーミング学会の発表内容。

『引用参考文献』

- 韓国観光公社(2012)「訪韓観光子市場分析」(R & D センター)。
谷岡一郎(1997)「ギャンブルの社会学」世界思想社、PP4-10。
梁亨恩(2006)『カジノ導入をめぐる諸問題』「アジア地域におけるカジノ産業の現象と展望」、大阪商業大学アミューズメント産業研究所。
梁亨恩(2009)「国際観光客のカジノモチベーション研究」、大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要。
李忠基(2003)『観光応用経済』日新社。
李忠基(2005)「カジノモチベーションの尺度開発と妥当性の検証」観光学研究第29巻第2号、PP423-441。
Alin, Gruber.(1970). "Purchase Intent and Purchase Probability". *Journal of Advertising Research* Vol10, 1, February 1970.
Chantal, Y., Vallernad, R. J., & Vallerierse, E. F. (1995). "Motivation and gambling involvement". *The Journal of Social Psychology*, 136 (6) 755-763.
Cook, A. A. (1992). "Towards understanding today's changing gaming participants", *Journal of Travel and Tourism Marketing*, 1 (2) 63-70.
Cotte, J. (1997) "Chances, trances, and lots of slots. Gaming motives and consumption experiences", *Journal of Leisure Research*, 29, 380-406.
Crompton, J. J. (1977). "Motivation for Pleasure Vacation". *Annals of Tourism Research*, 6, 408-24.
Iso-Aloha, S. E. (1980) "*The Social Psychology of Leisure and Recreation*". Dubuque IA: Brown.
Kim, S. S., Prideaux, B., & Kim, S. (2002). "A cross-cultural study on casino guests as perceived by casino employees". *Tourism Management*, 23 (5), 511-520. ("Increasing Chinese tourist Gamblers in Macao: Crucial Player Characteristics to Identify and Exploit" by Penny Yim King Wan の論文から引用)。
PwC. (2011). *Global Gaming Outlook the casino and Online Gaming Market to 2015*.
Wan, P. Y. K. (2011). "Increasing Chinese Tourist Gamblers in Macao: Crucial Player Characteristics to Identify and Export". *UNLV Gaming Research & Review Journal*, vol15.1.
Woodruff, C., & Gregory, S. (2005). "Profile of Internet gamblers: Betting on the future". *UNLV Gaming Research & Review Journal*, 9 (1), 1-14